2023 年 10 月

気象と気象用語

松山地方気象台

【10 月の気象】

朝夕の肌寒さを感じる季節となってきました。天気は周期的に変わり、移動性高気圧に覆われて秋晴れになることが多い月です。また、季語では「新米」「新酒」など、実りの秋を感じさせてくれます。

しかし、まだ台風の時期は終わっていません。9 月に比べると台風の発生数、接近数ともに少なくなりますが、四国地方への台風の接近数の平年値（1991 年～2020 年の平均値）は 0.4 個となっており、2、3 年に一度は四国地方へ接近することが考えられます。平成 26 年（2014 年）の 10 月には、台風第 18 号と第 19 号の 2 つの台風が日本に上陸し、愛媛県ではこの 2 つの台風により、暴風や大雨により被害が発生しました。

台風の接近が TV 等で報道されだしたら、台風情報を積極的に入手し、早め早めの台風対策や避難を心がけてください。

台風情報はこちらです → https://www.jma.go.jp/jp/typh/

四国地方への台風接近数の平年値（単位は個）

1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年間
				0.1	0.3	0.7	0.9	1.0	0.4			3.3

【気象用語】「気象衛星ひまわり」とは

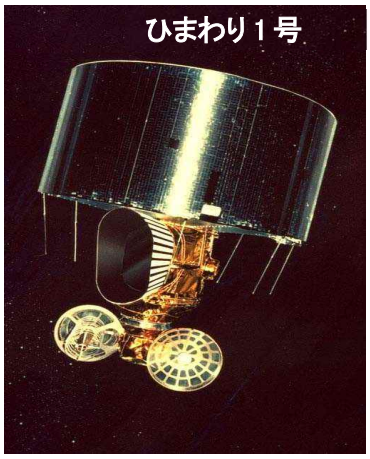
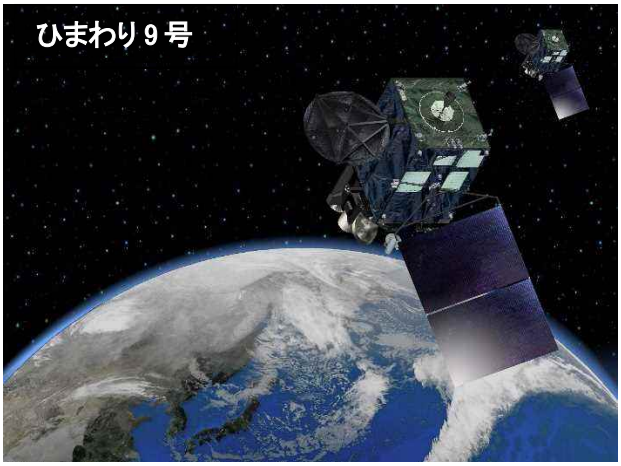
ひまわりは赤道上空約 36,000km の円軌道を周回しています。ひまわりは静止気象衛星といわれますが、止まっているわけではありません。地球の自転と同様に 1 日 1 回の周期で地球を回るので、地球から見れば常に同じ場所に止まっているように見えます。

ひまわり 1 号は 1977 年（昭和 52 年）7 月にアメリカから打ち上げ、翌年 4 月から観測を始めました。それから、数年おきにひまわりは打ち上げ、現在はひまわり 9 号が観測を行っています。

ひまわりは、日々の天気予報だけでなく、台風や集中豪雨・線状降水帯雲の監視・予測に不可欠の存在となっていますが、そろそろ次のひまわりの打ち上げについて考える時期に来ており、気象庁では次期ひまわりについて有識者を交え「静止気象衛星に関する懇談会」を開催してきました。その懇談会ではこれまでの雲の観測、海氷などの分布や海面・地面の温度などの観測のほか、線状降水帯等の予測向上のための観測機器の設置も検討されています。

なお、観測されたデータは、日本のみならず東アジア、オセアニア、西太平洋の多くの国で利用され、台風や集中豪雨等に関する防災気象情報の精度向上に役立っています。

〇気象衛星はなぜ「ひまわり」と名付けられたのか

1975 年、宇宙開発事業団によって人工衛星が打ち上げられ、「宇宙に花開け」という願いを込めて「きく」と名付けられ、これに倣い、気象衛星も花の名前を付けることになりました。

気象衛星は赤道上空からいつも地球を見つめていること、天気に関係する衛星であることから太陽をイメージさせる花の名前として「ひまわり」と名付けられました。